タイ語の名詞補語節標識 *wâa* の用例分析：TNC コーパスを使った予備調査

高橋　清子

１．はじめに

本稿の考察対象は名詞補語節標識 *wâa* である。しかしまずは名詞補語節標識が関係節標識や動詞補語節標識とどう区別されるのか、典型的な多義語/多機能語である *thîi* を例に説明したい。*thîi* は名詞と節の間に生起するとき関係節標識 relative clause marker あるいは名詞補語節標識 noun complementizer として機能する (Kullavanijaya 2008: 448-449)[1]。関係節標識 *thîi* は後ろの節をモノ名詞に転換し、その節起源名詞 clausal noun, nominalized clause[2] が前の名詞の修飾語（前の名詞に依存した修飾要素）であることを標示する（例：*khruu thîi rúu rûaŋ* 話を知っている教師 [教師、話を知っているモノ]；*rûaŋ thîi khruu rúu* 教師が知って

[1] Kullavanijaya 2008 による両者の分類基準は以下の通りである。関係節標識によって導かれる節の中の動詞と前の名詞の間には主語や目的語といった文法関係が認められる（例：*khruu thîi rúu rûaŋ* 話を知っている教師、*rûaŋ thîi khruu rúu* 教師が知っている話 [←教師が話を知っている]）。一方、名詞補語節標識によって導かれる節の中の動詞と前の名詞の間には何ら文法関係が認められない（例：*rûaŋ thîi khruu laa ɤɔ̀ɔk* 教師が辞職するという話）。

[2] Shibatani 2018 は節起源名詞を「動詞類基盤の文法的準体言 verbal-based grammatical nominalization」と呼ぶ。「準体言 nominalization」は「換喩的に想起されるコトやモノの概念（事態、事実、命題、事象参与者、生産物など）を表示する言語形式を産む過程；名詞に近いもの」と定義され、（コト/モノ概念を表示する）名詞類を起源とする「名詞類基盤 nominal-based 準体言」と（静的/動的な関係概念を表示する）動詞類を起源とする「動詞類基盤 verbal-based 準体言」に分類される。動詞類起源の準体言はコトを表示する「コト event 準体言」とモノを表示する「モノ argument 準体言」に分かれる。語と同じ大きさの「語彙的 lexical 準体言」は名詞性が高く、語より大きい「文法的 grammatical 準体言」は名詞性が低い。両者は連続体を成す。これらの用語を使えば、関係節は「動詞類基盤の文法的モノ準体言の修飾用法（コト/モノ概念を表示する denotation 機能を持つ）」、名詞補語節は「動詞類基盤の文法的コト準体言の修飾用法」、動詞補語節は「動詞類基盤の文法的コト準体言の名詞句用法（現実世界あるいは可能性世界に存在するコト/モノを指示する reference 機能を持つ）」と言い換えられる。Shibatani は関係節も名詞補語節も等しく修飾用法であるとし、両者の依存度/自立度の差を問題にはしていない。

いる話 [話、教師が知っているモノ]）（高橋 2011）。名詞補語節標識 *thîi* は後ろの節をコト名詞に転換し、その節起源名詞が前の名詞の補語（前の名詞から独立した補充要素）であることを標示する（例：*rûaŋ thîi khruu laa ʔɔ̀ɔk* 教師が辞職するという話 [話、教師が辞職するコト]）。さらに、嬉しいなどの情動の意味を表す動詞と節の間に生起するときの *thîi* は動詞補語節標識 verb complemenizer として機能している (Prasithrathsint 2009, 高橋 2017, Takahashi to appear)。動詞補語節標識 *thîi* は後ろの節をコト名詞に転換し、それが前の動詞の補語であることを標示する（例：*chán sĭa cay thîi khruu laa ʔɔ̀ɔk* 私は教師が辞職するのを残念に思う[私は残念に思う、教師が辞職するコトを]）。このように、節を従える *thîi* の本質的機能はその節を（モノ/コト概念を表示する）名詞に転換すること——節起源名詞を派生すること——である。関係節標識/名詞補語節標識/動詞補語節標識の *thîi* は基本的には（派生名詞標識 nominalizer の一種である）節起源名詞標識（‘clause nominalizer’ Matisoff 1992: 237; ‘clausal nominalization’ DeLancy 2002: 56; ‘clausal nominalizer’ 高橋 2017, 2018, Takahashi to appear）であると言える[3]。いずれにせよ、本稿ではタイ語研究における用語の使い方を踏襲し、名詞と節の間に生起する *thîi* を関係節標識あるいは名詞補語節標識と呼び、動詞と節の間に生起する *thîi* を動詞補語節標識と呼ぶことにする。

Langacker (2008: 202-205) の考えに沿って、補語 complement（補語名詞句、補語節などの全ての補充要素）と修飾語 modifier（形容詞句、副詞句、関係節など全ての修飾要素）の違いを説明する。補語とは「主要部の基礎構造を詳述する構成部分」である (ibid., 203)。主要部 the head とは「合成された全体表現と同じ文法的カテゴリーを有する構成要素」あるいは「全体表現の核となる意味内容を決める語彙項目」である (ibid., 193-194, 360)。主要部の基礎構造を詳述するのが補語の役割である。補語は自立し、主要部は補語に依存している（主要部→補語）。

[3] ただし動詞起源の動詞補語節標識 *hây, wâa* は、名詞起源の *thîi* と異なり、明確な節起源名詞標識の機能は持たない（cf. 第 4 節）。

前置詞句 near the door の場合、near the door と同じ文法カテゴリーを有している前置詞 near が主要部である。near の基礎構造を詳述する補語の名詞句 the door は自立し、主要部の near はその補語に依存している（near → the door）。叙述文 She sent him flowers.の場合、核となる意味内容を決めている動詞 sent が主要部である。sent の基礎構造を詳述する補語の名詞句 she, him, flowers（ただし動詞 sent が表す事象の焦点参与者を特定する名詞句 she, him は特別に主語、目的語と呼ばれる）は自立し、主要部の sent はその補語に依存している（sent → she, him, flowers）。一方、修飾語とは「主要部によって詳述された基礎構造を必要とする構成部分」である (ibid., 203)。主要部の基礎構造を修飾するのが修飾語の役割である。主要部は自立し、修飾語は主要部に依存している（主要部←修飾語）。名詞句 a table near the door の場合、a table near the door と同じ文法カテゴリーを有している名詞句 a table が主要部である。主要部の a table は自立し、修飾語の near the door はその主要部に依存している（a table ← near the door）。

節起源名詞は、（主要部の動詞に依存しない）動詞補語節（例：I know → <u>that he resigned</u>.）としても、（主要部の名詞に依存しない）名詞補語節（例：the fact → <u>that he resigned</u>）としても、（主要部の名詞に依存した）関係節（例：the fact ← <u>that I know</u>）としても機能し得る。

タイ語の補語節標識を扱う研究ではこれまで主に動詞補語節標識 *hây*、*thîi*、*wâa* や名詞補語節標識 *thîi* が取り上げられてきた (e.g. Kullavanijaya 2008; Matisoff 1991: 398-399, 437; Prasithrathsint 2009; Ransom 1986: 49, 101, 138)。しかし大規模電子コーパス Thai National Corpus (TNC) [http://www.arts.chula.ac.th/~ling/tnc3/] から名詞補語節の実例を収集したところ、*wâa* が名詞補語節標識として使われている例も多くあることが分かった。TNC コーパスから拾った名詞補語節標識を含む具体例を(1)–(3)に挙げる。(1)と(3)では *thîi* と *wâa* が単独でそれぞれ使われ、(2)では複合形の *thîi wâa* が使われている。

(1)	*khwaam ciŋ*	*thîi*	*kháw*	*yaŋ*	*mây*	*rúu càk*
	truth	COMP	PRON	yet	NEG	be.acquainted.with
	thəə	*dii*	*phɔɔ*			
	PRON	be.good	be.enough			
	彼が彼女をまだよく知らないという真実					
(2)	*khwaam ciŋ*	*thîi wâa*	*mɛ̂ɛ*	*rák*	*phŏm*	*mâak*
	truth	COMP	mother	love	PRON	be.plentiful
	母が僕をとても愛しているという真実					
(3)	*khwaam ciŋ*	*wâa*	*khon*	*mák*	*càʔ*	*dan thuraŋ*
	truth	COMP	people	be.prone.to	IRR	be.stubborn
	thâa hàak	*thùuk*	*tham*	*hây*	*sĭa nâa*	
	if	PASS	do	COMP	lose.face	
	面目を潰されれば人は頑固になるものであるという真実					

これまで *wâa* は発話や思考の意味を表す動詞に適用される動詞補語節標識であると見なされてきた（例：*chán bɔ̀ɔk phûan wâa kháw laa ʔɔ̀ɔk* 私は友人に彼は辞職したと告げた）。動詞補語節標識の *wâa* を扱う文献はあるが (e.g. Iwasaki & Ingkaphirom 2005: 259-268; Matisoff 1991: 398-399; Prasithrathsint 2009: 150-151; Ransom 1986: 101)、例(3)のような名詞補語節標識の *wâa* については詳しい分析がなされていない。管見の限り、これまで名詞補語節標識としての *wâa* を扱う研究論文はなかった[4]。

本稿の目的は、予備調査として TNC コーパスを利用し、タイ語の名詞補語節標識 *wâa* がどのように使用されているのかを大まかに探ることである。*wâa* と親和性を持つと考えられる名詞（cf. 表 1）を選び、それらの名詞を含む「名詞＋名詞補語節標識{*thîi* / *thîi wâa* / *wâa*}＋節」という形式を TNC コーパスから多数収集し、量的及び質的な分析を試みた。以下、第 2 節で調査方法を説明し、第 3 節で分析結果を報告し、第 4 節で *wâa* の語類認定について説明し、第 5 節で結語を述べる。

[4] Iwasaki & Ingkaphirom (2005: 266) には名詞補語節標識 *wâa* を含むとされる用例が挙げられているが、その用例についての解説はない（cf. 第 4 節）。

２．コーパス調査の方法

調査対象とした合計 11 の名詞①～⑪を表 1 に挙げる。TNC コーパスを使って *thîi*, *wâa* の直前に生起する語を調べ、その中から、比較的生起数が多く単純で一般的な意味を表す名詞を選んだ。ただし意味的に偏りがないよう、なるべく多様な意味の名詞を選定したため、生起数が少ない（1 桁台の）ものもいくつか含まれている。便宜的に(a)–(e)の 5 つの意味タイプに分類した[5]。

表 1: 名詞補語節標識 *wâa* と親和性を持つと予測される名詞

(a)発話タイプ	①คำตอบ *kham tɔ̀ɔp* 答、②ข่าวสือ *khàaw luuu* 噂
(b)思考/気持ちタイプ	③ความจริง *khwaam ciŋ* 真実、④ความคิด *khwaam khít* 考え/意志、⑤ความรู้สึก *khwaam rúu sùk* 思い/心情
(c)論理タイプ	⑥เหตุผล *hèet phŏn* 理由、⑦เงื่อนไข *ŋûaŋ khǎy* 条件
(d)出来事タイプ	⑧เรื่อง *rûaŋ* 話/事柄、⑨เหตุการณ์ *hèetkaan* 事件
(e)知覚タイプ	⑩รส *rót* 味、⑪สัมผัส *sǎmphàt* 感触/感じ

wâa は元々「言う」という発話の意味を表す動詞である。現代タイ語では補語節標識としての使用頻度が高いとはいえ、今なお「言う、文句を言う、咎める、述べる[6]」といった実質的な動詞の意味で日常的に使われている。したがって、(a)発話タイプ①②が最も名詞補語節標識 *wâa* と親和性が高いと考えられる。また、動詞補語節標識 *wâa* と共起する動詞は、発話、思考、認識、知覚などの意味を表す動詞（‘communicative verbs: verbs of saying, thinking and cognition, feeling, seeing, hearing, and acting’[7] Prasithrathsint 2009; ‘verbs of perception, cognition, and

[5] 日本語の「という」を含む名詞補語節「補語節＋という（名詞）」に関する多くの研究 (e.g. 大島 2010; Takahashi 1997; 寺村 1992: 261-296; 日本語記述文法研究会 2008: 67-84; 益岡 1997: 25-46; 益岡 2002) で提案されている様々な名詞分類を参考にした。タイ語名詞の分類自体は筆者による。

[6] 例えば「เหตุผลที่ว่านี้、เหตุการณ์ที่ว่านี้、ดำเนินเรื่องว่า」などの *wâa* は、名詞補語節標識としてではなく、「述べる（先に述べた）」という意味を表す動詞として使われている。

[7] Prasithrathsint (2009: 157-158) が挙げている communicative verbs の具体例は以下の通り。
saying: กระซิบ กล่าว กล่าวหา กำชับ เก็ง ขอพร เข้าใจ เขียน คัดค้าน คาด คาดหวัง คุย จารึก แจ้ง โจมตี ชม ชี้แจง ซักฟอก ตอกกลับ ตอบ ต่อว่า ตะโกน ตั้งคำถาม ตั้งชื่อ ตำหนิ ติง ตีความ เตือน ไต่สวน ถาม ถือ เถียง ทบทวน ทาย ทำนาย ทึกทัก นับ แนะ บ่งบอก บ่น บรรยาย บอก บังคับ บัญญัติ ปลอบใจ เปรียบเทียบ เปรียบว่า เปิดประเด็น เปิดเผย พยากรณ์ พร่ำพูด พิจารณา พิสูจน์ พูด ฟ้อง ยั้ว ยืนยัน รวบรัด ร้อง ระบุ ระแวง รับ รับประกัน รับรอง รายงาน เรียก เรียน ลงความเห็น ลงท้าย เล่า

speech’ 高橋 2017, Takahashi to appear) である。このことから、(b)思考/気持ちタイプ③④⑤、(c)論理タイプ⑥⑦、(d)出来事タイプ⑧⑨、(e)知覚タイプ⑩⑪も名詞補語節標識 *wâa* との親和性が比較的高いと予測される。

名詞①～⑪を含む「名詞＋*thîi*」形式と「名詞＋*wâa*」形式の用例を TNC コーパスから収集した。各名詞について「左隣 0 語、右隣 2 語目までに *thîi* あるいは *wâa*」という条件で検索し、それぞれの形式で最大 100 用例を無作為に抽出した（検索期間：2018 年 3 月～4 月）。そこから本稿の分析データとなる「名詞＋{*thîi* / *thîi wâa* / *wâa*}＋節 [節＝(主語+) 述語]」という形式の用例を拾い集めた。関係節は除き、名詞補語節だけを選んだ。複数抽出された同一用例があれば 1 つだけを残した。集めることのできた用例数は名詞ごと及び形式ごとに異なる（cf. 表 2）。

３．分析結果

収集した分析データを基に以下の《1》《2》《3》について調査し、名詞補語節標識の使用傾向を分析した。

《1》　表 1 に挙げた 11 の名詞のそれぞれに対して、どの名詞補語節標識がどの程度の割合で使われているのか。*wâa* の使用が多いのはどの名詞か。

《2》　*wâa* が導く補語節にはどのような特徴があるのか。

《3》　*wâa* はどのような統語環境で多く使われているのか。

まず《1》について。各名詞を含む 3 つの形式――Ⅰ：*thîi* 形式「名詞＋*thîi*＋節」、Ⅱ：*thîi wâa* 形式「名詞＋*thîi wâa*＋節」、Ⅲ：*wâa* 形式「名詞＋*wâa*＋節」――の用例数（トークン数）と名詞ごとに見た 3 つの形式の割合（小数点以下四捨五入）を表 2 に示す。

วิงวอน สมมติ สรุป สอน สั่ง สัญญา สันนิษฐาน สาบาน สาระภาพ สำทับ เสนอ เสริม ให้เหตุผล อธิบาย อภิปราย อวดอ้าง อวยพร ออกตัว ออกปาก ออกอุบาย อ้าง อุทาน อุปมา เอ่ย แอบอ้าง อธิษฐาน; thinking: อธิษฐาน คิด จำได้ ฉุกคิด ซึ่งใจ เชื่อ เชื่อถือ เชื่อมั่น ตระหนัก ทราบ นับถือ นึก ฝัน ยอมรับ รู้ วิเคราะห์ วิตก สงสัย สังเกต หยั่งรู้; cognition: ได้ความ แปล หมายความ; feeling: กลัว เกรง คำนึง แน่ใจ แปลกใจ ภูมิใจ มั่นใจ รู้สึก หวัง หวั่นเกรง อับอาย; seeing: จับตา ชัดเจน ดู ดูเหมือน ตรวจหา ปรากฏ พบ เพ่งเล็ง มอง เห็น; hearing: ได้ยิน ฟัง; action: เสแสร้ง กลับกลาย กลายเป็น แข่งขัน

表 2: 各名詞を含む 3 つの形式（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ）の用例数とその割合

		Ⅰ *thîi*	Ⅱ *thîi wâa*	Ⅲ *wâa*	総数
(a)	①*kham tɔ̀ɔp* 答	0 (0%)	6 (6%)	87 (94%)	93 (100%)
	②*khàaw luuu* 噂	2 (4%)	8 (14%)	47 (82%)	57 (100%)
(b)	③*khwaam ciŋ* 真実	10 (7%)	26 (19%)	102 (74%)	138 (100%)
	④*khwaam khít* 考え/意志	19 (16%)	15 (12%)	87 (72%)	121 (100%)
	⑤*khwaam rúu sùk* 思い/心情	15 (13%)	6 (5%)	94 (82%)	115 (100%)
(c)	⑥*hèet phŏn* 理由	39 (26%)	23 (15%)	90 (59%)	152 (100%)
	⑦*ŋûaŋ khǎy* 条件	9 (9%)	3 (3%)	88 (88%)	100 (100%)
(d)	⑧*rûaŋ* 話/事柄	4 (22%)	0 (0%)	14 (78%)	18 (100%)
	⑨*hèetkaan* 事件	8 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	8 (100%)
(e)	⑩*rót* 味	8 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	8 (100%)
	⑪*sǎmphàt* 感触/感じ	2 (50%)	1 (25%)	1 (25%)	4 (100%)

表 2 から以下のことが読みとれる。補語節を従える形式（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲの合計）が最も多く見つかったのは(c)論理タイプの⑥*hèet phŏn 理由*（152 例）で、最も少なかったのは(e)知覚タイプの⑪*sǎmphàt 感触/感じ*（4 例）である。名詞タイプごとに見ると、補語節を従える形式の用例数が多かった（100 例以上あった）のは(b)思考/気持ちタイプと(c)論理タイプで、少なかった（20 例未満だった）のは(d)出来事タイプと(e)知覚タイプである。

thîi が使用されている割合と *wâa* が使用されている割合を比較するため、表 3 には *thîi* を含む形式（ⅠとⅡ）の用例数と *wâa* を含む形式（ⅡとⅢ）の用例数を分けて示した。Ⅱの用例数が重複しているため、Ⅱの用例がない⑧⑨⑩を除き、用例数の合計は実際の総数より多い（百分率の合計が 100 を超える）。

表 3: *thîi* を含む形式と *wâa* を含む形式の用例数とその割合

		thîi（ⅠとⅡ）	*wâa*（ⅡとⅢ）	総数
(a)発話	①*kham tɔ̀ɔp* 答	6 (6%)	93 (100%)	93
	②*khàaw lɯɯ* 噂	10 (28%)	55 (96%)	57
(b)思考/気持ち	③*khwaam ciŋ* 真実	36 (26%)	128 (93%)	138
	④*khwaam khít* 考え/意志	34 (28%)	102 (84%)	121
	⑤*khwaam rúu sùk* 思い/心情	21 (18%)	100 (87%)	115
(c)論理	⑥*hèet phŏn* 理由	62 (41%)	113 (74%)	152
	⑦*ŋûaŋ khǎy* 条件	12 (12%)	91 (91%)	100
(d)出来事	⑧*rûaŋ* 話/事柄	4 (22%)	14 (78%)	18
	⑨*hèetkaan* 事件	8 (100%)	0 (0%)	8
(e)知覚	⑩*rót* 味	8 (100%)	0 (0%)	8
	⑪*sǎmphàt* 感触/感じ	3 (75%)	2 (50%)	4

wâa を含む形式（ⅡとⅢ）の用例数が最も多かったのは(b)思考/気持ちタイプの③*khwaam ciŋ 真実*（128 例）であることが分かる。統計学的に正しい方法で用例を収集し分析した訳ではないため正確な調査結果とは言えないが、注目すべきは、*wâa* との親和性が最も高いであろうと予測した(a)発話タイプ①②よりも(b)思考/気持ちタイプ③④⑤や(c)論理タイプ⑥⑦のほうが *wâa* と共起する用例数が多かったことである。*wâa* を含む形式は、声に出して誰かに伝える発話の内容を表すとき（発話タイプの名詞に続くとき）よりも、頭の中にある思考/気持ちや論理の内容を表すとき（思考/気持ちタイプや論理タイプの名詞に続くとき）に使われることが多いようである。逆に、物理的世界に生起し客観的に捉えられる具象的事象の内容は *wâa* を含む形式では表すことができないのではないかと考えられる。具象的な意味を表す⑨*hèetkaan 事件*と⑩*rót 味*は *wâa* と共起していない[8]。

[8] Frajzyngier (1991: 220) 及び Frajzyngier & Jasperson (1991: 135) は、認識モダリティの下位分類として、発話（の中で話者によって系統立てられた世界）に関する「*de dicto* 領域」(e.g. definite *that*-clauses が表す内容) と現実世界に関する「*de re* 領域」(e.g. gerundive *-ing*-clauses や infinitival *to*-clauses が表す内容) を挙げる。通言語的に、*de dicto* 領域の補語節は間接証拠性や伝聞などの内容を表し、*de re* 領

Ⅰ（*thîi* 形式）の用例数が多かったのは、⑥*hèet phŏn 理由*（39 例）、④*khwaam khít 意志* [9]（19 例）、⑤*khwaam rúu sùk 心情* [10]（15 例）である。割合で見ると、⑨*hèetkaan 事件*（100%）、⑩*rót 味*（100%）、⑪*sămphàt 感触* [11]（50%）、⑥*hèet phŏn 理由*（26%）、⑧*rûaŋ 話/事柄*（21%）の順である。

Ⅱ（*thîi wâa* 形式）の用例数が多かったのは、③*khwaam ciŋ 真実*（26 例）、⑥*hèet phŏn 理由*（23 例）、④*khwaam khít 考え*（15 例）である。割合で見ると、⑪*sămphàt 感じ*（25%）、③*khwaam ciŋ 真実*（19%）、⑥*hèet phŏn 理由*（15%）、②*khàaw luuu 噂*（14%）の順である。

Ⅲ（*wâa* 形式）の用例数が多かったのは、③*khwaam ciŋ 真実*（102 例）、⑤*khwaam rúu sùk 思い*（94 例）、⑥*hèet phŏn 理由*（90 例）、⑦*ŋûaŋ khăy 条件*（88 例）、①*kham tɔ̀ɔp 答*（87 例）、④*khwaam khít 考え*（87 例）である。割合で見ると、①*kham tɔ̀ɔp 答*（94%）、⑦*ŋûaŋ khăy 条件*（88%）、②*khàaw luuu 噂*（82%）、⑤*khwaam rúu sùk 思い*（82%）、⑧*rûaŋ 話/事柄*（79%）、③*khwaam ciŋ 真実*（74%）、④*khwaam khít 考え*（72%）の順である。

予測通り *wâa* との共起が多かったのは(a)発話タイプ①②、(b)思考/気持ちタイプ③④⑤、(c)論理タイプ⑥⑦、(d)出来事タイプ⑧である。特に①*kham tɔ̀ɔp 答*は見つかった用例の全てに *wâa* が含まれていた（例：คำตอบว่า ไม่เคย 経験がないという答）。*thîi* を含む場合であっても必ず *wâa* が含まれて *thîi wâa* 形式となり

域の補語節は直接知覚や目的などの内容を表す (Frajzyngier 1995)。この分類に従えば、*wâa* は *de dicto* 領域の補語節標識である。

[9] ④*khwaam khít* は、Ⅰ（例：ความคิดที่จะฆ่าพ่อ 父を殺す意志）では「意志」の意に解釈され、Ⅱ（例：ความคิดที่ว่า ที่ ๒ ดีที่สุด 二番目が最善という考え）とⅢ（例：ความคิดว่าสักวันหนึ่งท่านอาจจะตาแดง いつか患者が充血した目になるかもしれないという考え）では「考え」の意に解釈される。

[10] ⑤*khwaam rúu sùk* は、Ⅰ（例：ความรู้สึกที่เย็นสบาย 涼しく安楽な心情）では(e)知覚タイプに近い「心情」の意に解釈され、Ⅱ（例：ความรู้สึกที่ว่าตนเป็นส่วนหนึ่งของชุมชน 自分は共同体の一部であるという思い）とⅢ（例：ความรู้สึกว่าตนเองไม่ได้รับความเป็นธรรม 自分は公平に扱われていないという思い）では「思い」の意に解釈される。

[11] ⑪*sămphàt* は、Ⅰ（例：สัมผัสที่ละเอียดอ่อน 繊細で柔らかな感触）では「感触」の意に解釈され、Ⅱ（例：สัมผัสที่ว่าตนเองเป็นที่เข้าใจ เป็นที่ยอมรับ 自分は理解され容認されているという感じ）とⅢ（例：สัมผัสพิเศษว่าตรงไหนมีศพ どこに遺体があるかという特別な感じ）では(b)思考/気持ちタイプに近い「感じ」の意に解釈される。

（例：คำตอบที่ว่าเธอจะทำอะไรก็ผล่เข้ามาตอนกำลังล้างจานอยู่ あの人は何をするにしてもちょうど皿洗いをしているときに突然やってくるという答）、*thîi* 形式は 1 つもなかった。一方、⑥*hèet phŏn 理由* は、*wâa* 形式（例：เหตุผลว่าทำไมผมจึงตัดสินใจวันนี้ なぜ僕が今日決心するのかの理由）のほうが多かったが、*thîi* 形式（例：เหตุผลที่ไปอยู่อย่างลับๆ 隠れて行って潜伏する理由）もかなり多く見られた（41%）。

予測に反して *wâa* との共起が見られなかったのは(d)出来事タイプ⑨*hèetkaan 事件*と(e)知覚タイプ⑩*rót 味*である。用例数が少ないのでどこまで一般化できるかは不明確だが、⑪*sămphàt 感触/感じ*は、*wâa* と共起して抽象的な「感じ」に解釈されるもの（例：สัมผัสพิเศษว่าตรงไหนมีศพ どこに遺体があるかという特別な感じ）より、*thîi* と共起して具象的な「感触」に解釈されるもの（例：สัมผัสที่ฝ่าเท้ากระทบพื้น 足の裏が床にぶつかる感触）のほうが多かった。

次に《2》（*wâa* が導く補語節にはどのような特徴があるのか）について。*wâa* との共起が多く見られた①～⑧の各名詞に注目してみる。それらの名詞に後続する *thîi wâa* あるいは *wâa* に導かれた補語節（Ⅱ，Ⅲ）に共通する特徴として、全般的に長く説明調の文章であることが挙げられる。短いことも勿論あるが、仮定節などの従属節を含む複雑な文であったり（cf. 第 1 節の例(3)）、複数の文が続いたりすることが多い。数行にわたる語りが続くことも珍しくない。

Ⅱ，Ⅲの補語節のもう一つの特徴は、(a)発話タイプ①②、(b)思考/気持ちタイプ③④⑤、(c)論理タイプ⑥、(d)出来事タイプ⑧では疑問詞を含み得るということである（例：คำตอบว่าเชื่อหรือไม่ กับเรื่องราวต่างๆที่เล่า 語った様々な話を信じるか否かの答、ข่าวลือว่ามาจากเว็บไซต์ใด どのウェブサイトに由来するのかの噂、ความจริงว่า คิดอย่างไรกับเขา あの人をどう思っているのかの真実、ความคิดว่าเหตุใดพ่อจึงกล่าวกระนั้น どのような理由で父があのように述べたのかという考え、เหตุผลว่าเขาทำเพื่ออะไร 彼が何のためにするのかの理由、เรื่องว่าเมื่อไร ที่ไหน และจำนวนเท่าไรที่ควรจะจัดตั้งหนังสือพิมพ์ขึ้น いつ、どこで、どのくらい新聞を発足させるべきかという話）。一方、*thîi* によって導かれた補語節（Ⅰ）には、不定用法の疑問詞（例：ใครๆ 誰もが）を除いて、疑問詞が含まれている例はな

かった[12]。

以下、個々の名詞の用例について特に目立つ点を挙げる。

(a)発話タイプの①*kham tɔ̀ɔp 答*と②*khàaw luuu 噂*の補語節には、直接引用 direct quote（発話をそのまま引用したもの；主観的/間主観的な意味を表す終結小辞 final particles を含むことが多い）があった（例：คำตอบว่า ก็เริ่มที่จะถ่ายทำต่อแล้วครับ、คำตอบว่า ขอเวลาก่อนได้ไหม เรายังไม่แน่ใจตัวเอง、ข่าวลือที่ว่า "เขาเป็นเกย์"）。*wâa* が直接引用の動詞補語節を導く場合、その *wâa* は発話動詞と一緒に使われる直接引用標識 direct quote marker, quotative marker と見なし得よう。しかし *wâa* が名詞補語節を導く場合は、その名詞補語節が直接引用であろうとなかろうと、名詞補語節標識であるとしか言いようがない[13]。

①*kham tɔ̀ɔp 答*の *thîi wâa* 形式の補語節（Ⅱ）は、その答自体の内容（例：คำตอบที่ว่า ทพิท.ทิยํ ทุก.ขํ โลเก 貧苦は世の中の苦であるという答）よりも、その答が求められる疑問内容（例：คำตอบที่ว่าทำไมที่ข้อมือซ้ายของผมจึงมีเชือกแดงเส้นหนึ่งผูกอยู่ なぜ僕の左手首に赤い糸が結ばれているのかの答）を表している例のほうが多かった。

(b)思考/気持ちタイプの③*khwaam ciŋ 真実*については、心情内容（心痛の気持ちなど）を表す *thîi* 形式（Ⅰ）と思考内容（仮定や推論など）を表す *wâa* 形式（Ⅲ）が共起している例があった（ความจริงที่เจ็บปวดว่า ถ้าตนไม่ได้สั่ง...もし自分が命じていなかったら...という辛い真実）。便宜的にⅢに分類した。

(b)思考/気持ちタイプの④*khwaam khít 考え/意志*と⑤*khwaam rúu sùk 思い/心情*については、脚注 9, 10 で言及した通り、その解釈に次のような傾向が見られた。*wâa* を含まない形式（Ⅰ）では「非現実性標識 *càɔ*＋述語」が続き——つまり「{*khwaam khít / khwaam rúu sùk*} *thîi càɔ*＋述語」の形となり——より状況志向的

[12] Ransom (1986: 138) によれば、*thîi* は通常 Predetermined Truth Modality (Indicative: factive, epistemic necessity) タイプの述語 (e.g. regret, be certain) の補語節を導く（例：ฉันเสียใจที่จอห์นเป็นลิโอ 私はジョンが獅子座であることを残念に思う）。それ以外の述語 (e.g. be necessary, be possible) の補語節でも定 definite の要素があれば共起できる（例：จำเป็นที่เขาต้องไป 彼が行かなければならないのは必須だ、เป็นไปได้ที่จอห์นจะเป็นลิโอ ジョンが獅子座であることはあり得る）。

[13] あるいは動詞句連続体の中の後続動詞と見てよい場合もあるかもしれない（cf. 第 4 節）。

な「意志/心情」の意味に解釈されることが多い（例：ความคิดที่จะแต่งงาน 結婚しようという意志、ความรู้สึกที่ตื้นตัน 感激して喉が詰まる心情）。*wâa* を含む形式（ⅡとⅢ）では「節」が続き——つまり「{*khwaam khít / khwaam rúu sùk*} (*thîi*) *wâa*＋節」の形となり——より観念的な「考え/思い」の意味に解釈されることが多い（例：ความคิดที่ว่าผู้หญิงทำสิ่งที่ไม่สำคัญและที่ทางของผู้หญิงอยู่ที่บ้าน 女性は重要でない仕事をし、そして女性の居場所は家庭であるという考え、ความคิดว่าความพยายามคือความสำเร็จ 努力は即ち成功であるという考え、ความรู้สึกที่ว่า ผมไม่มีอะไรปิดบังคุณอยู่ 僕は何もあなたに隠し事をしていないという思い、ความรู้สึกว่าเป็นพวกเดียวกัน 同じ仲間同士であるという思い）。

補足であるが、コーパスからⅠ，Ⅱ，Ⅲの用例を探しているとき以下のようなことに気付いた。より観念的な意味を表す④*khwaam khít 考え*の補語節には *thîi* や *wâa* ではなく類名詞/類別詞 *rûaŋ* ‘matter, affair’ が使われている例があった（ความคิดเรื่องต้องสอนลูกให้รวย 金持ちになるよう子に教えなければならないという考え）。⑤*khwaam rúu sùk 思い/心情*に含まれる動詞 *rúu sùk* ‘feel’の直後に名詞補語節標識を介さず心情動詞/心理動詞やその他の動詞が続く例があった（ความรู้สึกอ้างว้าง 寂しい気持ち、ความรู้สึกอยากเจอหน้า 顔を見たい気持ち、ความรู้สึกรับผิดชอบแบบผู้ใหญ่ 大人としての責任感、ความรู้สึกด้อย 劣等感）。

(c)論理タイプの⑥*hèet phŏn 理由*の特徴は、先述のように、*wâa* を含む用例（ⅡとⅢ）の割合が 74%と高いだけでなく、*thîi* を含む用例（ⅠとⅡ）の割合も 41%と比較的高かったことである。*wâa* を含む用例の割合が高い名詞の中では異例である。⑥*hèet phŏn 理由* の場合も、④*khwaam khít 考え/意志*や⑤*khwaam rúu sùk 思い/心情*に似て、*thîi* が導く補語節と *wâa* が導く補語節には多少意味的傾向に違いがあるようだ。前者は結果事象に言及している（例：เหตุผลที่ต้องปลอมตัว 身分を偽らなければならない理由）ことが多く、後者は原因事象に言及している（例：เหตุผลว่าไม่อยากทำร้านใหญ่โต 大きい店をやりたくないという理由）ことが多いように見受けられた。観察した結果事象に言及する（「帰結として～に至った」という観察内容を提示する）のか、思索した原因事象に言及する（「なぜなら～だか

らだ」という思索内容を提示する）のか、その点で傾向を異にするのかもしれない。

一方、(c)論理タイプの⑦*ŋûaŋ khǎy 条件*は *thîi* を含む用例（ⅠとⅡ）の割合が 12%とかなり低かった。先述の⑥*hèet phŏn 理由*の補語節の意味分析が正しいとして、そこから類推すると、⑦*ŋûaŋ khǎy 条件*の補語節では「前提としてこうあるべきだ」という原因事象に言及する（条件内容を提示する）ことが普通であるため、*wâa* を含む形式との適合性が高いのかもしれない（例：เงื่อนไขว่าจะต้องไม่มีเงินค้างภาษีอยู่ก่อนหน้า それ以前に税の未払いがあってはならないという条件）。

(d)出来事タイプの⑧*rûaŋ 話/事柄*の特徴は、*thîi wâa* を含む用例（Ⅱ）が見られなかったことである。また、名詞補語節標識と共起する用例数自体が少なかった。*rûaŋ* は（名詞補語節標識を介さずに直接補語節を従えることができる）類名詞/類別詞（matter, affair）として機能することが多いのかもしれない。

次に《3》（*wâa* はどのような統語環境で多く使われているのか）について。名詞補語節標識 *wâa* を従える名詞①～⑧の前には動詞がある――「動詞＋名詞＋*wâa*＋節」の形を成す――ことが多かった。以下、それぞれの名詞の前にあった動詞を列挙する。これらの動詞の中で全般的にトークン数が多かったのは、一般性の高い意味を持つ มี *mii* ‘exist’, เป็น *pen* ‘become, COP’, ได้ *dây* ‘emerge, get’, ให้ *hây* ‘transfer, give’などである。

〈①*kham tɔ̀ɔp 答*〉 ได้ เป็น มี ให้ ได้รับ ต้องการ พบ หา ค้นหา ได้ยิน แทน เอา (หมาย)ถึง (มา)ถึง

〈②*khàaw luuu 噂*〉 มี เกิด บวก สร้าง ปฏิเสธ ได้ยิน ยุติ สดับตรับ กังวล ปล่อย (หวนนึก)ถึง (สอบถาม)ถึง (ให้สัมภาษณ์)ถึง

〈③*khwaam ciŋ 真実*〉 เป็น ได้ มี เปลี่ยน ปฏิเสธ ยอมรับ ยืนยัน พูด รู้สึก เปิดเผย เห็น พบ เผชิญ พิสูจน์ บอก บอกเล่า พูด สารภาพ รู้ ทราบ รับทราบ ประเมิน ประจักษ์ ตรัส ใกล้เคียง ศึกษาหา ค้นหา (นึก)ถึง (คำนึง)ถึง (ซึ้ง)ถึง

〈④*khwaam khít 考え/意志*〉 มี เกิด ได้ ใช้ ใส่ รวม เสนอ แจกแจง สื่อสาร ยืนยัน รื้อถอน โจมตี บรรลุ

〈⑤*khwaam rúu sùuk 思い/感じ*〉 มี เกิด เป็น ให้ ได้ ปรับ ขาด ละ มอง เสีย ไร้

〈⑥*hèet phŏn 理由*〉 เป็น มี ให้ ได้ ใช้ อ้าง โต้ หา เรียนรู้ รู้ รับทราบ ทราบ เห็น อธิบาย ชี้แจง แสดง บอก ถาม

〈⑦*ŋûaŋ khǎy 条件*〉 เป็น มี แสดง ยื่น วาง ตั้ง กำหนด
〈⑧*rûaŋ 話/事柄*〉 มี เป็น (กลาย)เป็น คุย ถกเถียง คิด

4．*wâa* の語類認定

タイ語の 3 つの動詞補語節標識――*hây* (< *hây* ‘transfer, give’)、*thîi* (< *thîi* ‘place’)、*wâa* (< *wâa* ‘say’)[14]――の中で、動詞起源の *hây* が最も動詞性が強い。動詞句の後ろに続くときでも否定辞によって否定され得る（例：แม่สั่งลูกไม่ให้แมวเข้ามา）。前の動詞句と共に動詞句連続体を構成していると考えることが可能だ (cf. Takahashi 2012)。一方、*wâa* も動詞起源だが、動詞性は低い。動詞句の後ろに続くときは否定辞によって否定されることはない（例：* แม่บอกลูกไม่ว่าออกไปได้ (แต่บอกลูกว่าอย่าออกไป)）。しかし語形変化のない典型的な孤立語で、多義語/多機能語が多く、さらに複合動詞や動詞句連続体が多用されるタイ語において、動詞性の高低はそう容易く判

[14] タイ語の動詞補語節標識の分類については以下のような先行研究の記述がある。Iwasaki & Ingkaphirom (2005: 255-268) は「verb of evaluation and emotion + *thîi*」と「verb of speech and cognition + quotative marker (general verb of speech) *wâa*; other verb + complementizer *wâa*」を挙げる。Prasithrathsint (2009) は「directive (causation and pressure) verb + *hây*」、「emotive (feeling, intention, mental character, and possibility) verb + *thîi*」、「communicative (saying, thinking and cognition, feeling, seeing, hearing, and acting) verb + *wâa*」に分けている。高橋(2017) 及び Takahashi (to appear) も同様に「desiderative and volitive-action verb + irrealis complementizer *hây*」、「emotion verb + clausal nominalizer *thîi*」、「perception, cognition, and speech verb + quotative complementizer *wâa*」に分けている。

Givón (1980) は補語を従える動詞を次のように大きく 3 種類に分類する：(a) manipulative verbs (e.g. order, cause, tell, force); (b) modality verbs (e.g. want, succeed, fail, start, finish); (c) cognition-utterance verbs (e.g. know, think, say)。これらの動詞分類には implicativity（補語節が表す命題の真偽についての含意）や factivity/presupposition（補語節が表す命題が真であるという前提）といった論理的概念が部分的に関与している。

Givón (2015: 664-665) によれば、定性は程度性を持った概念であり、最も定性が低い「非定の派生名詞 nominalized non-finite NP」と最も定性が高い「典型的な定の節 the prototype finite clause」の間には様々な補語節/従属節が存在する（a. [Her good knowledge of math] surely helped. < b. [Her knowing math well] surely helped. < c. [For her to know math so well] surely helped. < d. She wanted [to know math well]. < e. [Knowing math well], she then … < f. [Having known math well since childhood], she … < g. He assumed [(that) she knew math well]. < h. She knew math well.）。タイ語は「定の節を多用する言語 extreme finite languages」に分類される (ibid., 671)。

Dixon (2006: 23-27, 28-30) は通言語的によく見られる補語節のタイプは(a)事実 Fact, (b)活動 Activity, (c)可能性 Potential の 3 タイプであるとし、発話 SPEAKING 関連動詞の補語節について以下のように述べる。say, inform, tell（告げる）は一般に(a)タイプだけを取る。report は(a)または(b)タイプを取る。describe, refer to は典型的には(b)タイプを取る。promise, threaten は一般に(c)タイプを取る（補語節が間接目的語の位置に生起する場合もある）。order, command, persuade, tell（命じる）も一般に(c)タイプを取る。

断できるものではない。たとえ発話場面や談話文脈が明瞭であったとしても、動詞（内容語）として機能している *wâa* なのか、直接引用標識や補語節標識（機能語）として機能している *wâa* なのか、明確には区別できないことが間間ある。

まず Iwasaki & Ingkaphirom (2005: 266) が挙げている名詞補語節標識 *wâa* が含まれるとされる用例「เราก็ส่งจดหมายไปจากวิทยาลัยเนี่ยว่า ขอส่งนักศึกษาพวกนี้น่ะ ฝึกงาน」から検討してみたい。筆者の見解では、この *wâa* は名詞「จดหมาย 手紙」の補語節を導いている訳ではない。言い換えれば、*wâa* によって導かれている節「ขอส่งนักศึกษาพวกนี้น่ะ ฝึกงาน これらの学生を業務研修に送らせていただく」は名詞「จดหมาย 手紙」の補語として機能しているのではない。使役移動を表す動詞句「ส่งจดหมาย 手紙を送る」の後ろには方向性を表す動詞「ไป 行く（話者の視点から遠ざかる）」と起点を表す前置詞句「จากวิทยาลัยเนี่ย この大学から」があり、これらは「ส่งจดหมาย 手紙を送る」と共に一つの節を形成し——動詞句連続体を構成し——その節全体で「この大学から手紙を送る」という意味を表している。つまり、この用例の *wâa* はもう一つの独立した節の主動詞（伝達動詞 *wâa* ‘tell/communicate’）として機能しており、一般的な‘言葉で～と伝える’という伝達の意味を表している。用例全体で「我々はこの大学から手紙を送り、これらの学生を業務研修に送らせていただくと伝えた」という意味になる。*wâa* は名詞（あるいは名詞＋*thîi*）に直接続く場合に限りその名詞の補語節標識として機能すると見るべきである。

しかし *wâa* が聴覚動詞 (e.g. *dâyyin* ‘hear’, *faŋ* ‘listen’) や存在動詞/発生動詞 (e.g. *mii* ‘exist’, *kàət* ‘occur’) に続くとき（ได้ยินข่าวลือว่า、มีข่าวลือว่า、เกิดข่าวลือว่า）、名詞補語節標識（COMP）の *wâa* なのか (e.g., hear/exist/occur＋[rumor＋COMP …])、発話動詞（say）/伝達動詞（tell）の *wâa* なのか (e.g., hear/exist/occur＋rumor＋say/tell …)、曖昧である。機能語としてではなく動詞句連続体の後続動詞（say/tell）として機能している *wâa* だと見ることもできる。コーパスから拾った具体例を以下に挙げる。

(4) *tɛ̀ɛ* *dâyyin* *kham tɔ̀ɔp* *wâa* *nâa sǒn cay*
but hear answer be.interesting
しかし、興味深いという答えを聞いた

(5) *náp tâŋ tɛ̀ɛ* *mii* *khàaw luɯ* *wâa* *kháw* *sĭa chiiwít* *lɛ́ɛw…*
since exist rumor PRON die PERF
彼が死んだという噂があって以来…

(6) *kɔ̂ɔ* *kə̀ət* *khàaw luɯ* *wâa* *mii* *yĭŋ* *rɔ́ɔy lêm kwian…*
then occur rumor exist female many
それで（よく男を騙す）たくさんの女がいるという噂が起こった

例(4)–(6)の「{*dâyyin* ‘hear’/ *mii* ‘exist’ / *kə̀ət* ‘occur’}＋*wâa*」は動詞句連続体ではないか——*dâyyin* ‘hear’, *mii* ‘exist’, *kə̀ət* ‘occur’ が先行動詞で *wâa* ‘say/tell’ が後続動詞ではないか——、そう疑いたくなる理由の一つは、タイ語の発話動詞/伝達動詞の主語名詞句の指示物は「発話する人/伝達する人」（例(7)(8)）であるとは限らず、噂や新聞記事などの「言語媒介」（例(9)(10)）であってもよいことである。

(7) *khruu* *wâa* *yaŋŋay*
teacher say how
教師はどう言ったか

(8) *khruu* *dâyyin* *nák rian* *wâa* *yàaŋ níi*
teacher hear student say like.this
教師は生徒がこのように言うのを聞いた

(9) *khàaw luɯ* *lâw* *khǎan* *wâa* *kɛɛ* *phían phían*
rumor narrate announce COMP PRON slightly.distorted
噂があいつはおかしいと言いふらす＝多くの人があいつはおかしいと噂する

(10) *khàaw* *náŋsŭɯ phim* *rabùʔ* *wâa* ...
news news.paper mention COMP
新聞記事は...と言及した＝新聞記事には...と言及されていた

動詞句連続体の読みを許さないよう、敢えて *thîi wâa* 形式を使って名詞補語節であることを明示する場合もあるのではないだろうか（例(11)）。ここでややこ

しい問題に直面する。タイ語の発話動詞/伝達動詞の主語名詞句の指示物は噂や新聞記事などの言語媒介でもよいのであれば、(11)の *thîi wâa* は、名詞補語節標識ではなく、関係節標識 *thîi* ‘REL(ATIVE CLAUSE MARKER)’と動詞 *wâa* ‘tell’ の組み合わせだと考えることもできるのではないか（例(12)）。つまり、(12)では主名詞「*khàaw luuu* 噂」が関係節標識「*thîi*」を挟んで関係節「*wâa kháw sĭa chiiwít léɛw* 彼が死んだと伝える（←噂が彼が死んだと伝える）」を従えている——「彼が死んだと伝える噂があった」という意味を表している——のではないか。ただしこの考えは、前の名詞の指示物が言語媒体ではない場合（例(2)）には当てはまらない。

(11) *mii* *khàaw luuu* *thîi wâa* *kháw* *sĭa chiiwít léɛw*
exist rumor PRON die PERF
彼が死んだという噂があった

(12) *mii* *khàaw luuu* *thîi* *wâa* *kháw* *sĭa chiiwít léɛw*
exist rumor REL tell PRON die PERF
彼が死んだと伝える噂があった

もう一つのややこしい問題は、*wâa* の前の「*hây*＋名詞句」（e.g., *hây kham tɔ̀ɔp* ‘give, answer’, *hây khwaam rúu sùk* ‘give, feeling’, *hây hèet phŏn* ‘give, reason’）を「動詞＋目的語名詞句」と見なすのか、複合動詞と見なすのか、という問題である。前者（動詞＋名詞句＋*wâa*＋名詞補語節）の場合の *wâa* は名詞補語節標識だが、後者（複合動詞＋*wâa*＋動詞補語節）の場合の *wâa* は動詞補語節標識である。

５．まとめ

本稿では、現代タイ語で実際に使われている 3 種類の名詞補語節標識 *thîi*, *thîi wâa*, *wâa* の使用実態を調べ、その生起頻度や使用傾向を分析した。大規模電子コーパスから収集した多数の用例を分析することによって、タイ語話者がそれらの名詞補語節標識をどのように使い分けているのか、特に *wâa* をどのように使っ

ているのか、観察可能な範囲での一般化を試みた。同時に、*wâa* の語類認定の難しさについても指摘した。今回の調査結果をこれから取り組む予定の日本語とタイ語の名詞修飾表現に関する対照研究に活かしたい。

動詞とその補語節の意味的/形式的な統合度 (Givón 1980; Givón 1990: 514, 516, 537) については多くの研究があり、通言語的に、発話動詞（say）を起源とする様々な従属節標識 (Heine & Kuteva 2002: 261-269; Heine & Kuteva 2007: 236-240; Matić & Pakendart 2013) によって導かれる動詞補語節は、他の種類の動詞補語節に比べて、その動詞への統合度が低いことが知られている (Givón 1990: 554)。しかし名詞とその補語節[15] については、ポルトガル語などでは詳しい分析があるが (e.g. Gravik 2018)[16]、タイ語では分析がない。今回の調査によって、タイ語話者は複数の名詞補語節標識を使っていること、そしてその使い方にはある種の傾向が見られることが明らかとなった。異なる標識によって導かれた補語節にはそれぞれどのような特徴があるのか、異なる標識を使うことで名詞とその補語節の意味解釈はどのように変わるのか、等々、今後より深く考察していきたい[17]。

---

[15] Noonan (2007: 147-149) は名詞補語節を次のように動詞補語節と同じタイプに分類する。(a) Infinitive type：*Walt's ability to chew gum and tie shoes at the same time*; (b) Indicative type: *Andrea's belief that Max is the King of Greenland*; (c) Subjunctive type: *Queen Zelda's command that Zeke be shot*。Givón (1990: 472, 508-510) は英語の様々な名詞補語節を紹介している（*The suggestion that we should quit*; *Her periodic attempts to find a job*; *His knowing what went on there*; *His wanting to leave*; *His letting go of the knife*; *Her making him wash the floor*; *Her telling him to shape up*; *Her doing it to save Joe*; *Her wish that he would come back*; *His discovery that she was blind*; *His shouting: "Watch out!"*; *The fact (that) she knew him*）。

[16] Gravik 2018 はポルトガル語コーパスを用いて以下のことを明らかにした。接続詞 *que* 'that' で導かれた定の補語節は、非定の補語節に比べて、形式的な複雑さ formal complexity、自律性 autonomy、定動詞性 verbality の程度が高い (ibid., 539)。定の補語節を従える頻度が高い名詞の意味タイプは (a) 心理 Mental (ideas, cognitive states and processes)、(b) 言語 Linguistic (utterances, linguistic acts and products thereof)、(c) 事実 Factual (facts, states of affairs) の 3 タイプである (ibid., 558–559)。興味深いことに、補語節を従える名詞 shell nouns (cf. Schmid 2000) の意味タイプの分類はポルトガル語と英語で完全には一致しないという。

[17] 第 1 節で、名詞補語節より関係節のほうが名詞への依存度が高いことを説明した。タイ語の代表的な 2 つの関係節標識 *thîi* と *sǔŋ* によって導かれるそれぞれの関係節の主名詞への統合度の違いについては、高橋 2011 に議論がある。

謝辞

本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（プロジェクトリーダー：窪薗晴夫）傘下のサブプロジェクト「名詞修飾表現の対照研究」（リーダー：プラシャント・パルデシ、サブリーダー：堀江薫、2016 年 4 月～2022 年 3 月）の研究成果の一部である。2 回の研究発表会で聴衆の方々から貴重なコメントや有益なアドバイスを受け、執筆内容を深めることができた。感謝申し上げる。残る不備や誤りは筆者に責任がある。

参照文献

〈英語〉

DeLancy, Scott. 2002. Relativization and nominalization in Bodic. In Chew, Patrik (ed.) *Proceedings of the twenty-eighth annual meeting of the Berkeley Linguistics Society, February 15-18, 2002, Special session on Tibeto-Burman and Southeast Asian linguistics in honor of Prof. James A. Matisoff* (BLS 28S), 55-72. Berkeley Linguistics Society.

Dixon, R. M. W. 2006. Complement clauses and complementation strategies in typological perspective. In Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Complementation: A cross-linguistic typology*, 1-48. Oxford: Oxford University Press.

Frajzyngier, Zygmunt. 1991. *De dicto* domain in language. In Traugott, Elizabeth C. and Bernd Heine (eds.) *Approaches to grammaticalization, Volume 1*, 219-251. Amsterdam: John Benjamins.

Frajzyngier, Zygmunt. 1995. A functional theory of complementizers. In Bybee, Joan and Suzanne Fleischaman (eds.) *Modality in grammar and discourse*, 473-502. Amsterdam: John Benjamins.

Frajzyngier, Zygmunt and Robert Jasperson. 1991. That clauses and other complements. *Lingua* 83, 133-153.

Givón, Talmy. 1980. The binding hierarchy and the typology of complements. *Studies in Language* 4.3, 333-377.

Givón, Talmy. 1990. *Syntax: A functional-typological introduction, Volume 2*. Amsterdam: John Benjamins.

Givón, Talmy. 2015. *The diachrony of grammar, Volume 2*. Amsterdam: John Benjamins.

Gravik, Anton. 2017. Inflecting an infinitive or a finite verb? The case of Portuguese nominal complement clauses. *Folia Linguistica* 51.3, 539-585.

Heine, Bernd and Tania Kuteva. 2002. *World lexicon of grammaticalization*. Canbridge: Cambridge University Press.

Heine, Bernd and Tania Kuteva. 2007. *The genesis of grammar: A reconstruction*. Oxford: Oxford University Press.

Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom. 2005. *A reference grammar of Thai*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kullawanijaya, Pranee. 2008. A historical study of /thîi/ in Thai. In Diller, Anthony V. N., Jerry Edmondson, and Yong Xian Luo (eds.) *The Thai-Kadai languages*, Chapter 16, 445-467. London: Routledge.

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford, New York: Oxford University Press.

Matić, Dejan and Brigitte Pakendart. 2013. Non-canonical SAY in Siberia: Areal and genealogical patterns. *Studies in Language* 37.2, 356-412.

Matisoff, James A. 1972. Lahu nominalization, relativization, and genitivization. In Kimball, John P. (ed.) *Syntax and semantics, Volume 1*, 237-257. New York: Seminar Press.

Matisoff, James A. 1991. Areal and universal dimensions of grammaticalization in Lahu. In Traugott, Elizabeth C. and Bernd Heine (eds.) *Approaches to grammaticalization, Volume 2: Focus on types of grammatical markers*, 383-453. Amsterdam: John Benjamins.

Noonan, Michael. 2007. Chapter 2: Complementation. In Shopen, Timothy (ed.) *Language typology and syntactic description, Second edition, Volume 2: Complex constructions*, 52-150. Cambridge: Cambridge University Press.

Prasithrathsint, Amara. 2009. Complementizers and verb classification in Thai. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 2, 145-160.

Ransom, Evelyn N. 1986. *Complementation: Its meanings and forms*. Amsterdam: John Benjamins.

Schmid, Hans-jörg. 2000. *English abstract nouns as conceptual shells: From corpus to cognition*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Shibatani, Masayoshi. 2018. Nominalization in crosslinguistic perspective. In Pardeshi, Prashant and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese contrastive linguistics*, Chapter 12, 345-410. Berlin: Mouton de Gruyter.

Takahashi, Kiyoko. 2012. On historical semantic changes of the Thai morpheme /*haj*/. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 5, 126-141.

Takahashi, Kiyoko. to appear. Mermaid constructions in Thai.

Takahashi, Shino. 1997. *Use and functions of optional [TO IU] in Japanese clausal noun modification*. M.A. thesis, University of British Columbia.

〈日本語〉

大島資生．2010．『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房．

高橋清子．2011．「タイ語の関係節構文」長谷川信子（編）『70 年代生成文法再認識：日本語研究の地平』第 10 章，253-275．開拓社．

高橋清子．2017.「タイ語の名詞修飾要素の分類：名詞修飾の機能体系に関する一考察」国立国語研究所共同研究プロジェクト「名詞修飾表現の対照研究」平成 29 年度第 2 回共同研究発表会（富山大学、2017 年 10 月 29 日）の口頭発表資料．[http://crosslinguistic-studies.ninjal.ac.jp/noun/?page_id=274]

高橋清子．2018.「タイ語の名詞修飾表現」Prosody and Grammar Festa 2: 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第 2 回合同共同研究発表会（国立国語研究所、2018 年 2 月 17–18 日）の口頭発表資料．[http://crosslinguistic-studies.ninjal.ac.jp/noun/?page_id=274]

寺村秀夫．1992.『寺村秀夫論文集 I ：日本語文法編』くろしお出版．

日本語記述文法研究会（編）．2008.『現代日本語文法 6, 第 11 部：複文』くろしお出版．

益岡隆志．1997.『新日本語文法選書 2：複文』くろしお出版．

益岡隆志．2002.「複文各論」野田尚志、益岡隆志、佐久間まゆみ、田窪行則（編）『日本語の文法 4：複文と談話』第 2 章，65-116．岩波書店．